



令和4年度

11月人権一口講座



「多様性」というおめでたさ

朝井リヨウの「正欲」という本を読みました。

最近、よく聞く「多様性」という言葉に切り込んだ内容です。「ダイバーシティ(多様性)」や「LGBTQ(同性愛者等の性的少数者)」という言葉が世間一般的に使われるようになり、これからはそれを認め合う社会になることが求められています。

この本の読者である私も、「多様性、みんな違ってみんないい」と思っており、そんな自分を知らず知らずのうちに、ちょっとした理解者、先に出た考えの一人、と少し上から目線でしたのでした。

しかし、そんな私にゴッソ。この本の中でこうありました。

「多様性という言葉が生んだもの一つに、“おめでたさ”がある。これは、「想像を絶するほど理解しがたい、直視できないほど嫌悪感を抱き距離を置きたいと感じるものには、しつかり蓋(ふた)をする。そんな人たちがよく使う言葉」であると。

いろいろな趣味嗜好、価値観の方がいます。それを自分が想像できる範囲での「多様性」だけを礼賛し、想像できない「多様性」は異常・異物と切り捨ててしまう現実。「人権侵害」や「差別」にもなりうることです。ですが、それが多数派の見なら、「それが正解!」となっていく世の中が今であることは変わりない事実、現状なのです。

読み終えて「本当の意味でのダイバーシティ…って」と考えました。いや、今、真剣に考えないといけない!と思いました。

「ダイバーシティ」とは、国籍や肌の色、性別や宗教などいろいろな違いがある人たちがなりたっている環境を示すこと、その意味も改めて知りました。1冊の本との出会いでしたが、人を取り巻く様々なことについて考えるきっかけとなりました。

「人と違っていいじゃないですか。」「珍しいことがありましたか?それは素晴らしい!」「いやー。めでたいめでたい!」と、多様性というおめでたさを悪い意味で捉えなくてもいいのではないかと思いました。

「読書の秋」と言いますね。私は週に2冊ほど読み通すのですが、この本は一気に読み終えました。

最後に、人には多様性があるということ、そしてお互いをリスペクト(尊重・尊敬)しあえる感覚がとても大切であると分かった、秋の読書に浸った一日でした。

ふれあい文化センター広報誌かけはし十一月号用より

短メッセージ 自分を隠(かく)しているよりも 自分らしくいる方(ほう)が
本当(ほんとう)の笑顔(えがお)で笑(わら)えるよ

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー 豊田小学校6年 大嶋香莉奈さん の作品より